



<特集：将来構想3>

「京都大学図書館機構の将来構想案にみる図書館員からの提案」(概説)

はじめに

静脩45巻1号で、本年3月に刊行された「将来構想案」について、「特集：将来構想1」として前大西機構長による「将来構想案」のねらいや位置づけの紹介を、「特集：将来構想2」で、岡田前副機構長による「将来構想案」のとりまとめの経緯を紹介しました。今号では引き続き、「特集：将来構想3」として、それぞれ案の作成にかかわった図書館職員の立場から「将来構想案」に書かれた内容：図書館の「組織」・「サービス」・「資源」について概説します。

・ 図書館の組織

1. 図書館組織の現状と問題点

50以上の図書館・室を有する京都大学では長年にわたり「調整された分散主義」と呼ばれる部局図書館・室の独自性を重視する運営方式が採られ、予算、管理運営などすべてにわたり、それぞれが独自のルールで運営されています。

しかし、調整という面から見ると、これまで部局図書館・室のあり方を全学的な視点で調整されることがなかったことから、近年、正規職員がなく非常勤職員1人あるいは専任の職員がいない図書室まで増えており、サービス上も業務上も問題が生じています。

平成17年4月に発足した図書館機構は、附属図書館及び部局図書館・室の間において、総合的かつ合理的な調整を行い、全学の図書館機能を整備する方針で設置されましたが、その全学調整力はまだ弱く十分ではないため、今後その体制基盤の強化が望まれます。

2. 図書館機構の「基本理念と目標」と「構想案」

図書館機構では、京都大学の基本理念に基づき、平成19年4月に図書館機構の「基本理念と目標」を策定しました。これは、図書館機構の存在意義と基本的使命を規定し、日々の図書館活動の指針とし、将来構想の

コアとなるものです。機構の「基本理念と目標」の達成を目指し、全学図書館機能を充実するための具体的な内容を示したものが「構想案」です。

3. 図書館機構の課題と将来像

構想案では、課題として大きく 図書館機構の位置付けの明確化、 図書館・室連携の強化、 図書館職員のあり方、 図書館財政の安定的確保と学術情報の適切な蔵書構築、 図書館施設の整備を挙げています。これらの課題とそれぞれの具体的な解決の方策として次のとおり提示しています。

3.1 図書館機構の位置付けの明確化

図書館機構が、全学の図書館機能を充実・強化するために、図書館機構のあり方を見直し、京都大学におけるその戦略的位置付けを明確にすることが必要です。図書館機構は部局図書館・室の独自性を尊重しつつ、強力な連携・協力体制を持つネットワークを形成し、図書館業務を統括する組織へと整備し、調整機能を強化する。また、機構長が機構を指揮するに相応しい権限を持つとともに、責任を担う体制の整備が必要となります。

3.2 図書館・室連携の強化

附属図書館及び部局図書館・室を含む組織として、常に社会の変化、利用者のニーズに適切に対応したサービス展開を求められる図書館機構にとって、図書館業務の効率化・合理化の実現は不可欠です。京都大学図書館のスケールメリットを生かすためにも、サービス拠点やサービス窓口、整理業務拠点図書館や外国雑誌業務センターなどの図書館業務集中センターの設置など、サービスとバックヤードの整理業務の再編成を行い機能（役割）分担により、図書館の発展を目指します。

なお、今後最適な拠点の配置や機能分担のあり方、また図書館機構を構成する全学が合

意できる「図書館の基準」を定めることを必要としています。

3.3 図書館職員のあり方

図書館機構の目的の達成、図書館・室の連携強化のために附属図書館及び部局図書館・室が協力して実施にあたること「京都大学における全学の図書館機能に関する規程」に謳われています。また、図書館業務の機能分担による効率化・合理化を図り、柔軟な施策の実施を図るためにも、現在部局に所属する全学の図書館職員を図書館機構にも位置付けることが必要です。図書館機構兼任として、一致協力できる体制を整備する必要があります。

3.4 図書館財政の安定的確保と学術情報の適切な蔵書構築

図書館機構では、平成20年に全学経費及び部局の経費分担により全学提供外国雑誌の電子ジャーナル主体契約への移行を実現し、利用できる外国雑誌のタイトルを大幅に増強することができました。京都大学で費やされる図書館予算を効果的に運用することで、教育・研究支援の充実・強化を推進することができます。全学経費の安定的確保と専門教育、共通教育のための資料経費を全学共通経費化し、図書館機構として教育支援機能を実質化していくことを提案しています。

3.5 図書館施設の整備

これまで、部局の維持管理に委ねられていた部局図書館・室の図書館施設環境は、老朽化・狭隘化問題のみならず、保存環境の劣悪さなど問題・課題が山積しています。図書館機構としての図書館基準面積の考え方を整理し、保存図書館の設置や貴重な図書館資源の保存環境や快適な利用環境の整備・提供など全学的視野に立った図書館施設の質的、量的整備を行います。

．これからの図書館サービス

将来構想案は2年にわたる検討の結果です。検討の1年目として、将来構想検討の5つのワーキング・グループ(WG)のうちの1つであるサービスWGでは、これからの図書館サービスのあるべき姿について、将来構想プロジェクトの趣旨に沿って、附属図書館の若手職員が、自由闊達な発想を活かし、理想像を描きました。具体的に5年後10年後のサービスについて検討を重ねていく中、これまでの「調整された分散方式」と呼ばれてきた全学の図書館・室が各々に運営される体制では、新しいサービスを始めることはおろか、既存のサービスを維持することすら難しいという、危機意識が常にありました。そこで新しいサービスを展開するための前提には、全学的な基盤として以下の4点が必要と考えました。

職員および業務の集約

「資源共有の原則」の確立

学内図書館・室の連携強化

財政基盤の強化

これら4点の必要性が高いことは、サービス面のみならず、将来構想案全体に通底する認識であり、冊子では～章で詳述しています。検討の2年目は、学部の図書館・室の若手職員が中心となって、前年度の検討内容を整理するとともに、現状を的確に示す統計を挙げて、危機意識の客観的な裏づけをしました。

例えば、ここ数年、改組や移転に伴って、専任の職員を一人しか配置できない図書室が増えています(図1)。

そのため、サービスの低下や、サービス内容の図書館・室間格差が顕著になってきています。学生生活実態調査からも、図書館・室施設をよく使う利用者が減少する中、年に数回もしくはまったく図書館・室施設を利用しない学生が増加する傾向が、特に学部図書館・室に見受けられます。

最終的な検討結果は、統計や各種調査結果を交えつつ、これからの図書館サービスに関する



具体的方策として7つのカテゴリーにまとめました。冊子では、7つの見出しとその下位の項目の付番がわかりにくくなっていますので、以下に再掲しつつ、内容を紹介します。

1. 図書館・室施設の充実

- 1.1. 利用環境の整備
- 1.2. 長時間開館
- 1.3. 学習のための閲覧席、研究個室、共同研究室の整備
- 1.4. 教育用コンピュータシステム利用のための情報環境の拡充
- 1.5. バリアフリー化
- 1.6. 利用者のマナー向上とリラックススペースの確保

より多くの人々が足を運ぶ図書館・室となるよう、長時間開館する、閲覧席を増やす、空調を整備するなど施設環境に関する施策を計画的に進めます。

2. 所蔵資料の共同利用体制の整備

- 2.1. 学内図書館・室の利用規則の平準化
- 2.2. リコール制度の整備
- 2.3. 資料配送サービス体制の整備
- 2.4. ILL手続きの簡素化と提供体制の整備
- 2.5. ILL料金決済の簡素化
- 2.6. オンライン申込みの拡充

2.7. 多様化する学生への支援

2.8. 桂キャンパスでの利用者サービスと桂図書館の整備

どのキャンパスの利用者も公平かつ迅速に所蔵資料を利用できるように、オンラインで圖書の借用や複写の依頼ができるシステムや、キャンパス間や遠隔地に対して資料を配送する体制を充実させます。

3. アクセシビリティの向上

3.1. 図書館サービスとしての目録遡及入力

3.2. シラバス等掲載資料から蔵書検索システムへのリンク

3.3. 資料へのアクセスのためのサインの設置と標準化

3.4. 利用案内やホームページの標準化

全学の図書館・室にはまだ目録データが入力されていない資料が多数存在しています。これらの資料を過去に遡って入力し、蔵書検索システムで利用できるようにします。

4. 学術研究の現場への積極的支援

4.1. レファレンスサービスの拡充

4.2. 学術研究支援としてのレファレンスサービスの高度化

利用者の研究活動が多様化することによって、必要とされる図書館資料は多様化し、その利用形態も多様化します。どのような学問分野の研究者・学生にも充実したサービスを提供できるよう、レファレンスサービスの高度化と拡充を図ります。

5. 情報リテラシー支援

5.1. 図書館における情報リテラシー支援と業務としての確立

5.2. 全学的なリテラシー教育への積極的関与
学生が自らの課題を解決するために必要な情報を見つけ出し、活用する能力のことを情報リテラシーと言います。情報検索に通じたスタッフを抱える図書館機構は、学生の情報リテラシー向上に積極的に貢献します。

6. 社会貢献の推進

6.1. 図書館の地域公開による生涯学習支援

6.2. 学内組織との連携による情報発信

6.3. 図書館資料による地域の出版活動・展示活動への支援

6.4. 大学コンソーシアム京都のネットワークを活用した地域教育支援

6.5. 館種を超えた図書館連携による情報サービスの拡充

京都大学の基本理念である「開かれた大学」を目指して、学内の豊富な図書館資料を広く社会に公開し、地域社会の教育研究活動の活性化に寄与します。

7. 図書館サービスの前提としてのリスクマネジメント

7.1. 利用者の安全性の確保

7.2. 図書館資源のセキュリティの確保

不特定多数の利用者が出入りし、多くの貴重な資源を有する図書館・室は、災害や問題発生時の迅速で適切な対応が必須であり、図書館サービスの一環としての危機管理に取り組みます。

以上7つのカテゴリーのもとに列挙した具体的方策自体は、それが実現すれば望ましいものとして、賛否が大きく分かれるようなものではないと思います。しかし、方策それぞれが、どの程度の希求度や緊急性を持つかについては、立場や環境によって違いがあると思われます。冒頭でこれら具体的方策を提案するにあたっての背景には、これまでの分散方式ではなく、全学的な図書館機能を強化した基盤が必要との危機意識があると述べました。前号で岡田前副機構長が述べていたように、将来構想の一つとしてあげていた電子ジャーナル主体契約への移行と「共通経費化」が今年度から実現しました。実現の背景には従来の契約のままでは購読誌が著しく減少するという危機感を全学で共有できたことにあります。将来構想案全体についても、同様の危機意識の共有が、実現化のために不可欠と考えます。

・図書館の資源

1. 図書館資源の整備

1.1 コレクションの構築

全学の図書約30年間に亘る受入状況の推移をみると、受入冊数の増加比率は、全学的にはほぼ横ばいの状況ですが、人文社会科学系に比べ、自然科学系の比率が減少傾向にあります。大学として分野のバランスのとれた学術図書の収集を図るには、各図書館室での選書基準と体制を整備する必要があります。

1.2 図書の収集

学習・教育・研究を支援する学術情報基盤としての学生用図書、大学院生用図書、留学生用図書、研究用図書のそれぞれの収集の現状と課題について述べています。

図書館機構は、学生1人あたり1冊の図書の提供を目標に掲げており、2006年度には、全学的経費である基盤強化経費が措置され、経常的な予算が確保されたことにより、計画的な収集が可能となったことが大きな要因となり、ほぼその目的を達成しています。しかし、部局図書館・室での学生用図書の割合は低い傾向にあり、大学院学生用図書の整備とともに、予算の確保が重要な課題となっています。

留学生用図書についても学生用図書と同様に経常的な予算が措置され、国際交流センターと連携し、日本文化への理解を高め、日本語学習を強化する資料を配備し、留学生支援を強化しています。今後も引き続き、学生1人あたり1冊以上の新刊図書の提供、留学生用図書の充実を目指すことが必要です。

研究用図書の収集は、研究のための専有的な利用と図書館資源の共有をどのように両立させるかが課題です。研究用図書の増加の低迷は、運営費交付金の逡減、電子ジャーナルを含む雑誌価格の高騰による図書購入費の縮減が影響しており、また各種の

外部資金の性格により、図書を資産として扱えるか否か等会計処理が複雑化していることも研究用図書が登録されない一因となっています。教員の協力の下に研究室所蔵の図書の共同利用を推進し、図書館・室の利用環境を整備することが課題となっています。

大型コレクションの収集は、数年にわたり停滞していましたが、2006年度からは図書館機構が全学のニーズを把握し、全学的な経費措置を受けて高額資料の整備を進めています。

全学的な利用が期待される電子ブックの選定に際しては、利用動向の分析を踏まえた選定基準を確立し、コレクションの充実を図ります。

最後に図書の収書業務の問題点に対し、業務の拠点化と発注・支払業務の集約化という2つの構想を提案しています。

1.3 目録情報の整備

図書館の情報提供機能を躍進させた目録情報の電子化をめぐって、目録データの品質劣化、目録担当者の縮減等の問題点を明らかにし、全国的な目録構築に貢献することと同時に本学の所蔵資料の活用を図るための方策を検討しました。

図書館業務システムと資料配送体制の全学的な整備を背景に、拠点となる図書館に目録業務センターを設置し、業務の集中化を図り、和漢古書、多言語資料の整理部署を設ける等、古典籍から電子情報まで多様な媒体に対応できるシステムを作り上げる必要があります。

目録情報の整備の一環として遡及入力の実用性と中長期事業の計画について述べ、遡及入力の推進には専門知識、技術を持つ目録要員の確保が必須であるとしています。

1.4 図書館資料の保存

京都大学における図書館・室の資料保存の現状に対し、保存環境の整備、劣化予防対策

の必要性、職員の意識向上等、全学的な保存政策を提案しています。また、貴重な古典籍を含む大量で多種多様な資料を持つ本学規模の図書館では、保存専門部署の必要性があるとしています。

また書庫の狭隘化対策として、保存図書館の設置、分担保存の方針と計画の策定も緊急の課題としています。

2. 学術雑誌の収集と提供

VI章では電子ジャーナルを中心とした学術雑誌の収集と提供について記述しています。

まず、全体の半分以上を割り、本学における外国雑誌・電子ジャーナルのこれまでの検討経緯を詳しく説明しています。これは「静脩」vol.45, no.1での岡田前副機構長の説明にあるとおり、制度的変化が激しい分野においては、これまでの歴史的経緯をできるだけ整理して叙述することを目指したからです。

2.1 導入の経緯

電子ジャーナルの普及と契約モデルの変遷、本学の導入経緯、経費分担方法の検討経緯についてまとめています。

外国雑誌（冊子）の高騰と電子ジャーナルの登場により、全学で重複調整を行い外国雑誌の効率的な導入を図ってきましたが、やがて各部局・研究室の経常経費の減少の波を受け電子ジャーナルの普及もあいまって冊子体のキャンセルが増加しました。そのため、より適切且つ安定的な学術雑誌の供給について全学的な方針が検討され、結果として以下のような2008年からの新たな枠組みが決められました。

- ・ 電子ジャーナル主体の契約に移行する
- ・ 共通化対象誌は、全学利用の電子ジャーナルに限定する
- ・ 経費は、教育研究基盤経費比率による分担に特殊要因と傾斜を加味する
- ・ 全学認証による利用度が計れるようになれば、経費分担の指標に利用する
- ・ 冊子体講読は各部局の裁量とする

別途要求していたタイトル強化経費と合わせ、約2万5千誌、5億5千万円規模の電子ジャーナルが安定的に供給され始めました。

2.2 次期中期計画に向けて

さらに次の段階として、2008年に共通化できなかった雑誌に枠を広げる必要があります。

全学が購入している外国雑誌の内、冊子のみで電子ジャーナルが無いものを除くと、約2億円分（2006年調査時の冊子経費）が共通化されず各部局の経費で購入されています。これらは電子ジャーナル主体契約に移行すると高額になるため共通化が見送られた雑誌ですが、重要な学会誌や複数分野複数部局での利用が見込まれる出版社のものが含まれており、共通化による電子ジャーナルの安定的導入が望まれます。

共通化対象誌の枠を広げると経費は総額約8億円が見込まれます（約2億円が増加しますが、電子ジャーナルに移行すると高額になるものが残っていますので{2億円×移行・経年値上がり分} + {既共通化雑誌5億5千万円×経年値上がり分} = 約8億円と試算しました）。

実現には、図書館協議会の下で共通化すべきタイトルの選別や契約条件の精査といった十分な検討を行う必要がありますが、この構想案では、利用希望の多いすべての電子ジャーナルを共通化し学術雑誌の安定的な供給を図ることを目標に掲げました。

2.3 今後の課題

電子ジャーナルは、契約モデル、販売方法、技術革新など刻々と変化しています。変化が激しいため、近い将来像は描けても遠い将来像が描きにくい資料群ですので、最終節では今後の対応に影響を及ぼしかねない様々な問題点を抽出しました。また、部局の裁量となった冊子体について重複や一部保存等調整を行う必要があるのではないかという指摘や、発展途上にある国内の電子ジャーナルについ

て現状を説明しています。

2008年に至る全学的な検討では、常に大学の学術情報基盤としての学術雑誌の重要性と、誰もが利用できる電子ジャーナルの性質が共通化に適したものであるという認識が各教員から示されました。今後とも学術雑誌は重要な資料群の一つとして大学全体で安定的な供給を図る必要があります。

3. 電子情報資源を中心としたサービスの将来構想

電子情報資源をめぐる状況の変化はたいへん速く、しかも教育・研究環境への影響がとても大きいものです。このような変化はネットワーク環境の高速化と電算機資源の大幅なダウンサイジングによってもたらされました。そしてWeb2.0に代表されるキーワードを軸に現在も進行中であり、将来を予測することは容易ではありません。

電子情報資源の提供を担う大学図書館のサービスを考える際のキーワードは、「情報配信」「情報発信」「情報連携」です。多様化する電子情報資源への対応は、必然的に大学図書館機能の強化・高度化を必要とします。また、学術情報流通環境の大きな変化に柔軟に対応していくことを必要とします。このような変化の実態を調査研究し、よりよい教育・研究環境を提供するために図書館サービスを改善していくには、専門職としての図書館職員の養成・確保が必要不可欠です。

3.1 情報配信

「情報配信」機能は、学外の学術情報資源を京都大学内の利用者に提供していく機能です。具体的には「電子ジャーナル」「データベース」「電子ブック」の契約から提供までを指します。例えばElsevier社が提供する電子ジャーナルの2006年度の利用件数は110万件を超えており、年々増加傾向にあります。電子ジャーナル利用環境の整備・拡充は図書館にとって欠かせない機能の一つ

です。

データベースのオンライン検索は、京都大学では1985年から提供されています。当初は図書館職員がデータベースを検索する「代行検索」が行われていました。代行検索の利用のピークは1991年度の約1,000件です。次いでイントラネット版の検索サービスが普及しました。これは1998年度に約10万件の利用を記録しています。その後、インターネット版のサービスが普及し、例えばWeb of Scienceは2007年度に56万件を超える利用があり、なお増加傾向にあります。このように図書館は、利用できるデータベースの拡充ばかりではなく、データベース提供方法の変化にも対応していかなければなりません。

電子ブックの利用は、ようやくはじまったばかりですが、今後の展開が予想されます。

3.2 情報発信

「情報発信」機能は、学内の電子情報資源をウェブサイトを通して学内外に発信していくものであり「蔵書目録(KULINE)」「学術情報リポジトリ(KURENAI)」「貴重資料画像データベース(電子図書館)」が代表的なものです。社会貢献に対する説明責任が求められている今日、情報発信機能の拡充は欠かせないものとなっています。

蔵書目録(1998年ウェブ版公開)、貴重資料画像データベース(1998年公開)、学術情報リポジトリ(2006年公開)のいずれのシステムも登録件数・利用件数ともに国内有数のものです。特に貴重資料画像データベースは学外からの利用の占める割合が90%を超えており、大変よく利用されています。

3.3 情報連携

「情報連携」機能は、これまで個別に導入・構築されてきた様々な電子情報資源を総合的かつ効果的に利用しようとするものです。主な機能として「MyLibrary(MyKULINE)」

「リンクリゾルバ」「統合検索」「文献情報管理ツール」があげられます。MyLibraryは、利用者が、それぞれに応じてカスタマイズ可能なWeb利用環境を提供するものです。リンクリゾルバは、データベースの検索結果等から必要とする文献の入手までを効率的にサポートしていくものです。統合検索は、複数のデータベースを同時に検索できるようにするものであり、文献情報管理ツールは、

論文情報の記録に欠かせないものです。京都大学ではこれらの機能の全てが導入されているわけではありませんが、いずれの機能も教育・研究環境の充実のために必要な機能です。

このようにますます多様化していくインターネット上の学術情報資源を効率的・効果的に活用できる環境を整えていくことは、京都大学図書館機構の重要な使命となっています。

<特集：将来構想4>

「図書館に想う(1)」

どのような図書館サービスをめざすのか？

教育学研究科教授 やまだ ようこ

私が所属する教育学研究科は、附属図書館のすぐ隣にある。かつて私の研究室の窓は、附属図書館の閲覧室の大きな窓と、わずかな桜の木々と通路を隔てて並んでいた。夜になると、時計台がライトアップで浮かび上がり、図書館の灯りがくっきり明るく、そして閉館になるまで閲覧室で勉強する大勢の学生の姿が良く見えた。夜遅くまで学ぶ学生と競うように、私も研究室で遅くまで仕事をしながら、初心に帰るような新鮮な気持ちになった。

図書館のあり方も取り巻く状況も学生気質も激変したが、大学の核心にあるべき図書館の位置と学びたいという意欲を育てていく場という原点は、私自身の学生時代とそれほど変わらないようにも思える。

その附属図書館がリニューアルされ、学生の要望が高かった24時間利用可能な自学自習室が設置されることになった。私が今、学生であったら、やはり喜ぶだろう。ほかにも研究個室やグループ学習室や講習会室を充実させるなど、より便利に(Convenient)、使いやすく(Useful)、快適な(Comfortable)図書

館へと整備されることになった。

私は将来構想という大きな問題を語る公的立場にいるわけではないし、図書館の専門家でもない。この原稿の依頼がきたのは、ちょうど法人化と電子化など京大図書館が大きく変貌せざるをえない時期に、図書館協議会の委員になり、「京都大学図書館機構の将来構想案～学術情報基盤の強化を目指して～」の作成に少しかかわったからにすぎない。

「京都大学図書館機構のミッション(基本理念と目標)」作成WGに参加し、第2特別委員会の委員長として図書館サービスの改善に関与した。大きな整備としては、先にあげた附属図書館のリニューアル問題の他には、図書館や図書室をむすぶ「学内デリバリーサービス」を開始して、学内の図書の貸し借りが便利になったことがあげられるだろう。また、文献複写や現物貸借申し込みのオンライン化、開館・開室時間の統一化、コピー料金の値下げなど、図書館サービスはきめ細かい領域にわたるので、図書館の置かれた困難な現状や、現場で働く図書館職員の方々の熱意や大変な

努力が少しずつわかってきた。

そこから多くのことを学ぶことができたが、「限られた予算と資源のなかで、京都大学の図書館は、何をサービスすべきなのか？」という根本的な疑問もでてきた。そこで本稿では、WG や委員会が出た議論を思い起こしながら、今後も考えつづけていくために、2 つほどの私見を投げかけてみたい。

ハイブリッド・ライブラリーと図書館の発信機能

これからは、紙媒体を中心とした「図書」から、電子媒体が中心になるだろうから、「図書館」とは何かということ自体が問われる時代になるだろう。京都大学図書館機構の基本理念には、「人類の知的資産である学術情報資源や新たに生み出される知的成果を不断に収集、整理、保存し、関連する情報を発信するとともに、常に最上級の先進的情報サービスを研究開発し、提供する」という文言が入った。

従来の図書館においては、収集、整理、保存が中心であったが、図書館を情報サービス機関と位置づけ、情報発信や新たな知の生成機能が加わったことが大きな違いである。さらに多くの情報が双方向性とコミュニケーション機能を持ち、収集と発信の両機能が同時に可能になる日も遠くはないだろう。従来の紙媒体を主軸にした図書館から、電子ジャーナル、電子ブック、データベース、アーカイブなど電子媒体を活用した「ハイブリッド・ライブラリー」に変貌するには、メディアセンターや各種専門家の知恵を集めた協力体制が必要かもしれない。

ブリティッシュ・ライブラリーなどでは、すでに学術研究や教育に用いられる映像やビデオ資料のアーカイブ化が進んでいるが、図書館の概念が大きく変貌しつつある現在、図書館の情報サービスとは何であり、将来は何に力を入れて、どこを重点的に整備していくかという将来構想をふまえた具体的なビジョンが必要になるだろう。

利用者のニーズに応じてより便利にするサービスと、図書館の理念に基づいたサービス

図書館のサービスとは何かについて、特に「24時間利用可能な自習室」の是非について議論が多々あった。限られた予算や人的資源のなかで、学生や利用者のニーズにできるだけ応えて、より便利に、より快適に、使いやすい図書館にするために、開館時間を長くすることがサービスなのか。それとも、ハイブリッド・ライブラリーに向けて、高度な情報の集積機能やアクセス機能を整備するほうが必要なサービスなのか。

これは二者択一の問題ではもちろんない。しかし、「24時間利用可能な自習室」については、勉強する場のない留学生などを支援する必要があるという意見があった一方、本当に必要なサービスなのか、夜中に帰る学生のセキュリティは大丈夫だろうか、夜も眠らない生活習慣を助長することは教育的か、環境問題を考えるとエコ・ライフに逆行するのではないかなど、疑問も多々あがった。コンビニの24時間営業や簡易宿泊所がわりのマンガ喫茶のあり方が問題になっているように、今後も実態や使われ方を見ながら議論しつづけていく必要があるだろう。

アメリカのある大学では、便利さを追求して24時間開館しているが、学生が夜中に帰るときにはガードマンに電話すれば個別に駐車場まで送り迎えしてくれるなど、徹底したセキュリティ対策がとられている。イギリスのある大学では、旧態依然とした開館時間で、夕方17時に閉館してしまうので不便きわまりない。しかし、専門分野に関わる司書の職業能力は高く、専門書は教員が研究の合間に自分の専門に偏って選ぶのではなく、司書が全体バランスを考えて稀少本も含めて案を出すので、貴重な学術資料の網羅性と信頼性はきわめて高く、アーカイブやデータベース機能も充実している。どちらが大学図書館として行うべきサービスなのか、何をめざしていくのか、答えは簡単ではないだろう。

図書館サービスについては、目に見える具

体的なサービスの向上や改善だけではなく、どのようなサービスを行う図書館をめざして

いくのか、多様な観点から根本的な議論をつづけていきたいものである。

(やまだ ようこ)

<特集：将来構想5>

「図書館に想う(2)」

図書館機構への期待

エネルギー理工学研究所教授 尾形 幸生

図書館にはこれまでの人生でずいぶんお世話になってきた。どのような利用を行ってきたか振り返ってみると、3つの要素があったように感じる。(1)読む本を探し、借出す、(2)物事を調べる、(3)憩いの場として、新聞や一般雑誌を眺めたり、時には昼寝をする。高校までの図書館では(1)と(3)の利用形態が中心だった。大学に進学して、大学の図書館は(2)の機能が中心であり、物足りなく思ったことを思い出す。情操教育の基礎は高校までで終わっていることになっているので、大学の図書館は「物事を調べる」機能が中心となるのは、在るべき姿なのだろう。学術雑誌については、電子化により便宜性が飛躍的に高まっている。かつては、図書館に行って、着目雑誌の目次を冊子ごとに調べ、さらにはChemical Abstractsの頁をめくって関連雑誌記事を見つけ出して、コピーする。ここまででくたびれてしまって、コピーしたことで記事を読んだような気になる。その結果、机にはコピーの山が積み上がる。現在では、これらの作業が研究室にいたまま、しかも効率的に行うことができるようになっている。本年度からの学術雑誌の電子ジャーナル主体購入契約への変更と、ジャーナル数の増加の方向で、便宜性が一層高まることが

期待される。ただし、電子ジャーナルの数を追うのではなく、内容の充実に努める方向での拡大を望む。一方、専門書については、図書館による一層の充実と管理を期待する。専門書はすぐに絶版となることが多く、必要となっても入手困難な状況にたびたび遭遇する。例えば、教職員が図書以外の費目で購入している専門書の情報をデータベース化し、全教職員が利用することができないだろうか。電子化が進めば、物理的空間としての図書館は不要になってしまう。しかし、図書館は智の生産にとって欠かせない存在である。専門書や資料の収集保管、そして閲覧する場所として、また、智を求める人が集い、学び、憩う場所としての図書館は必須である。良い組織には良い図書館がある。現在、本学には50を越える図書館または図書室が存在する。大きく変わってきている図書館機能に対応するように集約を含めた再編成の可能性も検討すべきではないだろうか。本学には図書館機構が存在し、以上述べた諸課題に全学的視点から取り組む役割を担っている。各部署の意向を尊重しながらも、機構の下に全学的な視点から図書館システムの在り方を考えることのできる体制を築いて欲しい。

(おがた ゆきお)

<特集：将来構想 6 >

「図書館に想う(3)」

図書館機構の機動性向上に向けて

化学研究所教授 畑 安雄

京都大学では、2005年4月、全学図書館機能の合理的・効果的運用により財源削減下の高騰図書費負担や定員削減による図書利用者サービス低下などの問題に全学協力して対処するため調整機関として図書館機構が設置された。また、2008年3月、成熟した機構の将来像を描いた「京都大学図書館機構の将来構想案～学術情報基盤の強化を目指して～」が発表された。この素案で現機構の問題点と改善案が検討され、改善が機構強化に繋がるとの期待を産む。この案に沿って、機構の機動性向上のための組織強化について考えてみたい。

図書館機構に、図書館協議会推薦で総長任命の機構長（附属図書館長を兼務）が置かれるが、他機構長に比べ権限は低い。図書館機構長に権限を与えて手腕を発揮し易くするには、他機構長や他大学図書館長の場合と同様、機構長を総長指名で理事・副学長格とし上層委員会に出席可能とすべきである。これで、図書館協議会で議論された全学図書館問題に対する結論が、部局長会議等の上層委員会で覆され混乱することも減るであろう。機構長は、附属図書館長を兼務せず、約60の部局図書館・室を調整する手腕を発揮すべく中立にあり、独立機関長となるべきである。現状

では、機構機能が附属図書館業務と一体となり、機構長の手腕が十分に発揮され難い。附属図書館は、例えば、総合図書館と改名かつ機能強化し要の図書館となり、館長は図書館協議会指名で、副機構長として機構に携わる。更に、機構事務局は、全学業務に携わる掛、例えば雑誌業務センター、システム管理掛、電子情報掛、研究開発室などで構成し、附属図書館から分離されるべきである。現状では、図書本館的役割をする附属図書館に図書館機構が隠れた印象を与え、存在意義が見えない。部局図書館・室は部局所属ながら規模等で役割分担し、キャンパス毎の拠点図書館、サービス図書室、資料図書室などとして要となる総合図書館と共に機構長の下に置かれ、図書館機構内でネットワークを構築させる。拠点図書館の一部の職員は機構から派遣され、近隣のサービス図書館や資料図書室の業務支援をする。他の職員は機構職員を兼ねて機構業務にも携わる。これが、図書館から独立し機能強化された図書館機構の在るべき姿であろう。勿論、財源措置も必要である。

以上は、筆者の私見であるが、図書館機構の機能強化のために早急な組織改革が必要であろう。

（はた やすお）

<一冊の本シリーズ 10 >

埴谷雄高 『死霊』

人間・環境学研究科准教授 安部 浩

この未完の長編小説を最初に耽読したのは、十八歳から二十歳にかけての頃、すなわち私が最も多感な時分であった。では一体、『死霊』の如何なる点に私は感銘したのか。それは、「現存の総転覆」と「全剽滅」を企図し、権謀術数の限りを尽くす不撓不屈の革命家たる主人公の首猛夫が、(津田康造や黒川健吉といった)他の登場人物達と思想的に対決する - その一言一句が息詰まるような緊迫感に満ちつつ、連綿として何時果てるとも知れぬ - ドストエフスキー風の対話(第二、第三、第四、第六章)であった。或いは又それは、「死者の電話箱」なる器具を発明し、今將に身罷らんとする者との交信を試みる医学生の挿話(第五章)や、自らが考案した「自己捕獲装置」を用いて、夢の中に現れる自分自身を捉え、これと対話せんとする精神病患者の物語(第七章)等において認められるが如き、ポーを彷彿させる奇想天外な思考実験であった。

だが当時の私の心をとりわけ激しく捉えたものは、主人公の瞑想的な哲学青年、三輪与志を屢々襲う「宇宙的な気配」(乃至は「無限の寂寥感」と呼ばれる経験の描写(第一、第二、第四章)であり、そうした神韻縹渺たる経験に根差した「自同律の不快」なる気分を言い表さんとする彼の独白であった - 「《不快が、俺の原理だ》と、深夜まで起きつづけている彼は絶えず自身に呟きつづけた。《[...] おお、私は私である、という表白は、如何に怖ろしく忌まわしい不快に支えられていることだろう! この私とその私の間に開いた深淵は、如何に目眩むような深さと拡がりを持

っていることだろう!》」(第二章)。

とはいえここで注意を要するのは、三輪与志にとって「自同律の不快」とは、唯に<自己自身に対する根元的な違和感>といった個人的な感覚のみを意味するものではないことである。寧ろ彼の見るところ、それは(彼自身をも含めた)宇宙の万物をして不断に自己超越をなさしめる「^{メタモルフォーゼ}変容」の原理(「満たされぬ魂」)に他ならない。「《不快 - それが俺の原理だ》と、自身の想念のみへ閉じこもりながら、彼はさらに呟きつづけた。《そいつは俺の魂を動かす唯一の槓杵だ。そして、恐らくはこの宇宙をもその涯まで動かし得る唯一の槓杵だ。[...] 自らを自らがついに持ちきれ得ぬ底知れぬ不快 - そいつは宇宙の涯から涯へまでわたって《俺》の原理になっている》」(第四章)。そして「万象をその万象自体たらしめずひたすら前へ前へと異なった変容へ向ってつき動かすその自らに内在する満たされぬ力」(第五章)である、この「自同律の不快」に基づいて、それ自身をしてそのつど新たに生成せしめて已まぬような存在者を三輪与志は「虚体」と命名する。というのも厳密に言えば、かかる存在者は、同一律に掣肘せられることのないその本性からして、一瞬たりとも決して「存在者」ではありえず(何となれば「存在」とは<甲がある>ということであり、そしてこの<甲がある>とは、<甲が甲としてある>といった自己同一性を常に含意する以上、「存在者」は「自己同一的な存在者」として、必然的に同一律に従う為である)かといってそれはまた - 萩原朔太郎の詠う「死

ない蛸」の如く、永久に「満たされぬ魂」を抱え続けるものとして - 全き「虚無」とも異なるのであってみれば、我々はこれを「あってなく、なくてあるところの何かたらざるを得ない」(第八章)ものという意味で「虚体」と呼ばねばならぬからである。

爾来、『死霊』は - 三輪与志の無二の親友にして、その思想の最大の理解者である黒川健吉の言(第三章)を借用するならば - 「自己が自己とぴったり重なる」ところの「確実な、堅固な」実体の概念に立脚してきた従来の存在論に対して、「実体に決定的に矛盾するもの」たる「虚体」に基づく「新たな形而上学」を打ち立てんとする前人未踏の試みとして、私を魅了し続けてきたのであった。

しかしながら同書をこの度改めて読み直してみ、私は、これまで自分が専ら己が関心を惹く箇所だけを摘み食いするような得手勝手極まる読み方をしていたことに否応なしに気付く羽目になり、猛省を強いられた。例えば嘗て私は迂闊にも、この小説の題名がそもそも何を言わんとするものであるかということについて、深く思いを廻らせてみたことがなかった(無論「死霊」とは、直截的には「悪意と深淵の間に彷徨いつつ/宇宙のごとく/私語する死霊達」という序詞に由来するわけであるが、その文言の真意を私は長らく量りかねていたのである)。だが今回の繙読を通して、私は、三輪与志の兄である高志 - 彼は若き日に革命運動に専心したが今は病臥の身であり、毎晩のように顔だけの幽霊が複数出現する様を目撃する - に対して、その枕元を訪れた夢魔が語る言葉(第五章)と、三輪与志の所説を敷衍する黒川健吉の述懐(第三章)に思わず瞠目させられた。「[...]お前のまったく思いがけぬ『あいつら』の顔と顔とそれにまた顔が高い塀の向う側からひょいと現われはじめた頃、お前はお前が従事している『革命』がやがて果たし得るだろう最大の地上の楽

園も、ついに如何なる死者をも償い得ないことを、[...]身に深くしみて覚え知りはじめていたのだ。[...]こちら側の生者と高い塀の向こう側の死者は、何もかも絶対に調和させたいその灰色の《存在の壁》にぼんやりとなんとなく区切られたまましかも怖ろしいばかりに厳然とわかたれているのだ。」「おお、自身が自身へ重なる - それをしないと、怖ろしい。[...]全世界からひき裂かれる孤独に耐えきれなかったのです。[...]そして、其処から出発したあげくのはてに、この確固たる全世界へ見事に密着したのです。[...]だが、それはもはや変革されねばならない。そんな自身をいたわりつづける、生温たかな自己確認は、三輪にあっては、根こそぎ変革されねばならなかったのです。』

私見によれば、前掲の二つの引用文が示しているものは、<革命に代表される、この世における正義の実現の試みは全て、あくまでも生者同士の間での公正を希求するだけであって、死者を初めから射程に収めていない以上、それが目指すところの「(生者の)正義」はそのまま直ちに、「死者に対する不正義」に他ならぬ>という苦い洞察であり、この世における我々の生は、我々の存在の自己同一性に依拠しており、更にこの自己同一性の根柢には、我々の自愛の念が潜んでいることに対する痛ましき内省である。恐らくは、「虚体」概念に立脚した「新たな形而上学」の構築は、我々生者が自己愛に駆られて暗々裡に犯している不正を静かに告発している「死霊達」の幽き「私語」に、我々が耳を澄ますことから始まるのであろう。

私にとって『死霊』は - 三島由紀夫にとって『葉隠』がそうであった如く - 「ただ一冊の本」である。

(あべ ひろし)

新装開館、医学図書館

- 耐震改修工事を終えて -

医学図書館の活動内容については、かつて『静脩』で紹介させていただいたことがあります。（「生命医科学情報基地としての京都大学医学図書館」Vol.42 No.2 p.18-19, 2006年3月）

今回は、昨年度の耐震改修工事を終え、平成20年4月3日より新装開館したことをご報告します。



建物外観

1. 工事による改善点

工事において耐震構造とともに重点を置いたのは、「バリアフリー」と「省エネルギー」です。

「バリアフリー」については、利用者用エレベーターを新設し、大部分のドアを広いスライド式にしました。また、なるべく床面の段差をつくらず、スロープとなるように気を配りました。これらは利用者の利便性を高めたのみならず、ブックトラックや重い資料を運搬する業務の効率も上げる結果となりました。

「省エネルギー」は、閲覧室と廊下の上に仕切りドアを設けて温度調節を効率的にしたこと、外壁断熱の施工、窓ガラスにエコガラスを採

用したこと、人がエリアに来ると点灯するセンサー式の照明に変更したこと、などにより実現しました。

その他工事による改善点として、雨漏りを解消できたこと、1階の情報コーナーと事務室をOA対応床面としてコード類をすっきりさせたこと、不足がちだった閲覧席数を増加したこと、などが挙げられます。

引き続き、館内の各スペースについて紹介します。

2. 1階フロア

まず入退館ゲート前に立つと、頭上に情報ディスプレイがあります。館内設備やサービス内容を画像・文字コンテンツとして作成し、数秒おきに切り替え表示しています。同じディスプレイがラウンジにも備え付けてあります。ラウンジは、館内で唯一飲食可能なスペースです。談笑しながら、あるいは1人でも気軽に利用できる雰囲気となっています。



1F ラウンジ

入退館ゲートの内側にはカウンターがあり、資料の貸出・返却・更新の他、各種申請を受け付けています。医学図書館では、「情報環境

「機構教育用コンピュータシステム利用コード」(ECSコード)の発行・更新などの代行受付をしています。他に医学部・医学研究科および関連部局所属の方には、館内でのノートパソコンの貸出や、後述する「小閲覧室」「グループ学習室」「セミナー室」の予約・利用手続も、このカウンターで行っています。

カウンターに沿って奥に進むと情報コーナーがあります。電子ジャーナルなどの閲覧や、レポート作成などができる端末が並んでおり、視聴覚資料もここで利用します。

3.2階フロア

2階の「雑誌閲覧室」には、新着雑誌があります。閲覧席数は75で、そのうち8席は情報コンセントと電源が使えます。

この閲覧室に隣接して、定員4名の「小閲覧室」が2室あり、3階のグループ学習室などと共によく利用されています。

4.3階フロア

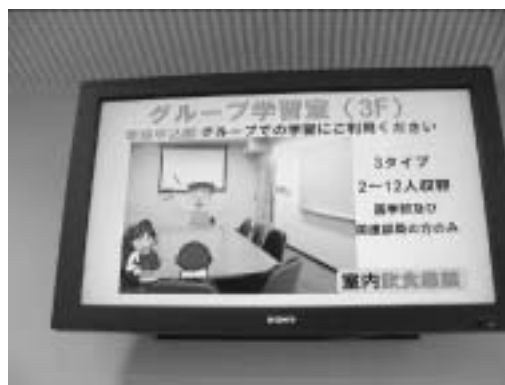


3F 閲覧席

3階の「図書閲覧室」には、国家試験対策やシラバスなどのコーナーを含め、年代の新しい図書を配架しています。情報コンセントや電源が使える14席を含め、59の閲覧席があります。窓際を横一列に占める机は一席ずつ仕切られており、個人机の感覚で、より集中して学習できるように配慮されています。また、今回の工事期間に書架を増設して、収容可能

冊数を増やしました。書架の最上段と2段目には、感震落下防止装置を付けました。

3階にはこの他に、グループ学習室(定員10~12)3室、セミナー室(同25)1室があります。2階の小閲覧室とグループ学習室はお互い話し合いながら学習できる設計となっています。セミナー室はAV機器の備え付けがあり、講義向けの座席配置で、学会発表練習などにも利用されています。



3F グループ学習室(情報ディスプレイ)

5.書庫

医学図書館には、第1書庫、第2書庫、地下書庫があります。地下書庫は、エレベーターを新設する際、スペース確保のため書架を一部撤去せざるを得ず、収容可能冊数が減りました。しかし第1書庫に書架を増設してそれを補っています。

6.今後について

新装開館後も、KULINEの表示や書架の見出しを早急に実情に合わせる努力をしています。

今後とも、教育・学習・研究・医療活動を支援し、その進歩と発展に貢献していきたいと考えています。

(医学研究科教務・学生支援室図書(閲覧)担当)

韓国の大学図書館訪問記

附属図書館情報サービス課相互利用掛 野上 香織
人間・環境学研究科学術情報掛 西川 真樹子

1. はじめに

「韓流」人気ですっかり身近な国となり、また京都大学へも多くの留学生を送り出している韓国へ、2008年2月25日から29日まで、訪問調査の機会を得ました。

訪問先は、KERIS(Korea Education & Research Information Service)、ソウル大学、国立中央図書館、延世大学、梨花女子大学の5ヶ所で、いずれもソウル市内に位置しています。これらの図書館で実習を交えて学んだ、最新の図書館サービスをご紹介します。

2. KERIS(韓国教育学术情報院)



KERIS

KERISは1999年に組織統合により新設された、国の教育政策を担う機関です。近年は国内外の学術情報の流通促進に重点を置き、Webを活用することで、収集から提供までのトータルなサービスを実現しています。

例えば、KERISが提供する

RISS(Research & Information Service System)[<http://www.riss4u.net>]は、雑誌記事の検索機能に加え、1)総合目録、2)文献複写申込、3)フルテキストサービス、4)海外商用データベース検索の4つの機能を備えた統

合検索システムです。海外商用データベースは大変高額ですが、韓国ではナショナルライセンスを取得したり、大学図書館がコンソーシアムを形成することで購買力強化に努め、経費削減の実績もあげています。また、RISSからはCiNiiを使って日本語論文の検索および取寄せ申込みも可能となっており、申込者のリクエストは図書館担当者へ送信されるとともに、ILL(Interlibrary Loan)システムを通じてスムーズに処理されます。日韓間では2007年4月にシステムが整備されたこともあり、今後のより活発な利用が期待されます。

3. ソウル大学中央図書館

1946年、ソウル大学は韓国初の国立大学として設立されました。京都大学とほぼ同じ学生数を有するソウル大学は、ソウル南部に位置する冠岳区に広大なメインキャンパスを構えています。訪問日には卒業式が行われており、雪の舞う寒い季節に旅立の日を迎える学生の、すがすがしい表情が今でも印象に残っています。



中央図書館 ブックカフェ(ラウンジ)

ソウル大学図書館は本館の他に7つの分館、および約80の学部図書館・資料室で構成されています。これらは「韓国最大のリサーチ・ライブラリー」と称され、人事・予算の面で

部分的に連携しつつも、学部の自治による独立性が尊重された運営方式を採用しています。

私たちが2日間お世話になった中央図書館は、冠岳キャンパスの中腹にあり、蔵書数350万冊、閲覧席約3,500席(うち500席は24時間利用可能)の大規模な図書館です。

まず興味を引いたのは、携帯電話を活用したサービスです。



Mobile Pass が利用証代わり

ソウル大学では利用証の代わりに携帯の待受画面を使えば、入館ゲートや自動貸出機を利用できます。これは「Mobile Pass」と呼ばれ、一人に一つ配布されるQRコードを図書館Webサイトから自分の携帯電話にダウンロードし、それをバーコードの読み取り機に近づけて認証させる仕組みです。さらに、図書館資料をOPACで検索し、その結果を手軽に携帯メールに送信できる「MMS(Multimedia Messaging Service)」を国内で先駆けて採用しています。これを利用すれば、学生はタイトルや請求記号をメモする手間を省くことができるため、評判も上々とのことでした。

また、昨年(2007年)から新たな研究支援サービスを始めています。教員の研究室を直接図書館員が訪問し、図書館への要望・不満を収集してサービス向上に結びつけています。韓国では、この活動を取り入れようとする大学図書館も多く、韓国大学図書館界全体が目しているサービスです。

4. 国立中央図書館

1945年に開館した国立中央図書館は、約640万冊の蔵書を有し、韓国公共図書館界の

中心となって新サービスに積極的に取り組んでいます。一般市民が利用する図書館本館、国家文献の収集・保存を目的とする資料保存館、図書館員の研修事業を担う司書研修館の3館を中心とし、2006年には国立子ども青少年図書館を開館しました。



国立中央図書館インフォメーションカウンター

本館見学时、特に人気のコーナーはインターネット等が自由に利用できるデジタル資料室でした。この部屋では持ち込みパソコンの使用も許可されています。また、アシスタントスタッフが配置されており、データベースの利用方法等についてアドバイスを受けることもできます。本館敷地内には現在、国立デジタル図書館を建設中ですが、Web上の情報だけでなく多様なデジタル資料について、収集・管理から提供までの研究開発を担う予定とのことでした。

5. 延世大学中央図書館

延世大学は創立1885年と、韓国内で最も古い大学です。教員数(常勤)は約2,800、学生数は約30,000と京大より規模も大きく、人文・社会・医歯薬理工系の学部・大学院の他、附属病院、博物館もあります。2006年には、英語のみで講義を行うアンダーウッド国際大学を開設したことで知られています。キャンパスはソウル市内の新村と、江原道原州市の世宗にあり、今回は中央図書館のある新村キャンパスを訪問しました。

延世大学には、中央図書館の他に分館が7つあります。私たちが訪問したときには、現在の中央図書館の隣に新図書館を建設中で、

この新館は2008年5月に「Yonsei-Samsung Library」として開館しました。新図書館への引越中のお忙しいときにもかかわらず、快く訪問を引き受けてくださいました。



延世大学中央図書館

延世大学中央図書館の大きな魅力は、24時間学習室提供サービスです。中央図書館内で約2,400席が学習席として用意されています。座席によって使用できる時間帯や時間数が異なり、図書館入口のタッチパネル式装置で学習席の空席状況や予約がリアルタイムで行えます。また、Web上でも空席数を確認することができます。韓国内では24時間学習室を開放している大学図書館は少なくありませんが、システムやWeb上で管理している図書館は珍しく、なかでも延世大学図書館はその最先端と言えるでしょう。



座席予約システムのイメージ

また、図書館業務システムの向上にも意欲的で、2009年に韓国内で初となるEx Libris社製品を導入予定です。Ex Libris社は多言語に対応した世界最先端の図書館システムベンダーとして知られています。計画的に図書館業務の効率化を実現することで、次世代

OPACや電子資料の新ポータルサイトにおける利便性向上に役立てています。

新図書館建設や海外新システム導入で、活気にみちた図書館でした。

6. 梨花女子大学中央図書館

梨花女子大学は延世大学のすぐ隣にあります。韓国で最初に誕生した女子大学で、現在、教員数は約870、学生数は約20,000と、女子大学としては世界最大規模を誇ります。

また、ちょうど訪問した翌月の3月からECC (Ewha Campus Center) がオープンするとのことでした。ECCとは、2004年から始まった大学のプロジェクトのひとつで、地下に施設をつくり、地上は緑化するという、韓国で今流行の半地下施設です。正門から京都駅ビルのような大階段がキャンパス中ほどにある事務本部棟の前まで伸び、中には学習室や講義室、カフェ、生協、書店、スポーツクラブ等が入っています。この学習室は図書館の管理となっています。



オープン直前のECC

梨花女子大学図書館には中央図書館の他に分館が5つあります。韓国内の他大学のように学習室を24時間開館していますが、女子大学のため警備には気を使い、午後11時から午前5時までは、緊急時や保護者の迎え以外、一切の出入りを禁止しています。

また、Web上での図書館サービスにも力を入れています。京都大学のMyKULINEと同じく、梨花女子大学図書館MyELISでも自分の資料利用状況を確認できたり、他機関から資料やコピー取り寄せを申し込むことができ

ます。さらに、オンラインでのレファレンスサービス「Ask a Librarian」を利用できる他、「1:1 Q&A」を使えばMyELISに自分だけのFAQを作ることができます。このように、学内者へのきめ細やかなサービスを充実させています。

この他にも、利用者にストレスを感じさせない資料提供方法を積極的に取り入れています。資料を独自にスキャンし、OPACの検索結果から本文にリンクさせて学内公開している他、延世大学等の近隣大学と定期便を巡回させて、利用者の求める資料の貸し借りをを行っています。

7. 韓国の図書館サービス

今回の韓国訪問では5つの施設を見学しました。それぞれに特色がありましたが、共通していえることは、

1. 学習環境の整備・充実
2. 学術情報のデジタル化
3. Webサービスの活用
4. 職員のモチベーションの高さ

だと感じました。京都大学附属図書館でも24時間学習室を新設予定ですが、学習スペースとリラックススペースをうまく調和させ、学生にとって居心地の良い空間を作り出そうとする姿勢は大変参考になりました。

また、韓国では国内学術雑誌の多くが電子化され、Webで公開されています。日本と同じく、各大学での機関リポジトリに対する取り組みも積極的です。このようにWebを活用した新サービス提供のためのシステム開発や、海外の図書館業務システムの導入には、システムライブラリアンの存在が欠かせません。韓国の大規模大学図書館では、システムライブラリアンが在籍しているのが一般的ですが、日本ではそうではありません。システムライブラリアンとは、図書館学の他にIT知識をもった図書館職員で、日本ではその地位は確立されていません。しかし、これからますます図書館システムが複雑化・高度化していく中で、図書館内のシステムについての意見を統一し

たり、その要望をベンダーに正確に伝えたりするためには、システムライブラリアンの存在が必要とされるでしょう。

なお、日本と韓国では図書館職員の養成方法が異なります。日本で司書の資格を取るには、大学在学中に司書課程の科目を履修し、大学卒業と同時に司書資格を取得する方法が一般的です。しかし、韓国では取得学位ごとに司書の階級が決まっています。そのため、図書館学の他に、修士課程や博士課程で他の専門分野を修めた図書館職員は、その専門知識に見合った専門職としての地位が保証されています。

システムライブラリアンの他に、韓国内の多くの図書館では様々な専門分野をもった図書館職員がいます。そういう人々の、図書館をよくしていこうという熱意が、新サービス導入や新図書館建設等の新しい方向へ図書館を動かしているといつて過言ではないでしょう。そのようなモチベーションの高さを感じた5日間でした。

8. おわりに

本訪問にあたり、駿河台大学文化情報学部金容媛先生、並びに韓国芸術総合学校芸術情報館曹在順さんに大変なお力添えをいただきました。心よりお礼申し上げます。



ソウル大学にて

(のがみ かおり)

(にしかわ まきこ)

図書館の動き

平成20年

- | | | | |
|-------|--|--------|----------------------------------|
| 7月 2日 | 京都大学図書館協議会第三特別委員会
(平成20年度第1回) | 9月 17日 | 京都大学図書館協議会第三特別委員会
(平成20年度第2回) |
| 6日 | 平成21年度職員採用二次試験(図書系) | 20日 | ジュニアキャンパス(～21日) |
| 11日 | 平成21年度職員採用面接考査(図書系)
(～14日) | 22日 | 京都大学図書館協議会幹事会
(平成20年度第2回) |
| 16日 | 京都大学図書館協議会第二特別委員会
(平成20年度第1回) | 25日 | 図書系連絡会議 |
| | 国立大学図書館協会人材委員会 | 26日 | 京都大学図書館協議会(平成20年度第2回) |
| | セキュリティ講習会・個人情報保護講習会 | 30日 | 附属図書館運営協議会(平成20年度第3回) |
| 22日 | 近畿イニシア能力開発専門委員会(阪大) | 10月 1日 | 附属図書館改修工事開始
入館不可(利用制限:～11月5日) |
| 24日 | 図書系連絡会議 | 7日 | 平成20年度大学図書館職員短期研修
(～10日:芝蘭会館) |
| 25日 | 国公私立大学図書館協力委員会(大阪学院大) | 23日 | 図書系連絡会議 |
| 8月 7日 | オープンキャンパス2008(～8日) | 27日 | 京都大学図書館協議会(平成20年度第3回) |
| 9月 3日 | 京都図書館大会(同志社大) | | |
| 9日 | 附属図書館運営協議会(平成20年度第2回)
実務研修(リテラシー・中級編) | | |

目次

<特集:将来構想3>	
「京都大学図書館機構の将来構想案にみる図書館員からの提案」(概説).....	1
<特集:将来構想4> 図書館に想う1	
どのような図書館サービスをめざすのか?.....	やまだ ようこ .. 8
<特集:将来構想5> 図書館に想う2	
図書館機構への期待.....	尾形 幸生 .. 10
<特集:将来構想6> 図書館に想う3	
図書館機構の機動性向上に向けて.....	畑 安雄 .. 11
植谷雄高『死霊』<一冊の本シリーズ10>.....	安部 浩 .. 12
新装開館、医学図書館 — 耐震改修工事を終えて —.....	14
韓国の大学図書館訪問記.....	野上 香織・西川 真樹子 .. 16
図書館の動き.....	20

編集後記

前号に引き続き「京都大学図書館機構の将来構想」をテーマとした特集記事を掲載しました。図書館職員による「将来構想案」の概説と、「図書館に想う」と題して、3名の教員の方から図書館への期待、サービスや組織への提言を寄せていただきました。次号では、学生、院生の方々のご意見を掲載する予定です。(editor)